

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

俺の問いとその先は。

【作者名】

to110

【あらすじ】

主人公である比企谷八幡。高校一年生の物語。

彼を取り巻くものは人のなんなのか。親しみ、楽しみ、悲しみ、憐れみ、期待に嫉妬……

彼の見た世界は彼のものであり、彼女の見た世界は彼女のものである。そんな矛盾で作られたこの世界。

人は他人に何を求め、何を奪って、そして与えていくのだろうか。

もしかしたら、というifとかそういうことではなく、完全に改変された物語。

タグの人物は登場してきたときにその都度追加。

こんな筆者が送る長編シリーズ第3作目、ご覧ください。

First / album

俺は今、松葉をつき、前に進む。まあ簡単にいえば誰もいない廊下を歩いているわけだ。これを俺は今、松葉をつき、世界を動かすとかいつて中二病の名残を出してもいいかもしれない。なにそれダサい。松葉をつける理由なんて限られてくる。そして、俺はその限られた理由の中でも一位だろうという理由でついている。それすなわち、

高校初日、いわゆる入学式に、事故に遭った。ということだ。交通事故というのは松葉をつく理由第1位だろう。調べてないから知らないけどね。

事故の影響でクラスのコミュニティーには属せず、ぼっちになった。

……どこまで俺にぼっちの神様がついてくるのだろうか。誰か教えてくれんかねー。っと、誰もなにも、そもそも話す人がいない。眼が腐つてるとか超不便。いつから腐ったんだろうか、永遠の謎である。

っと、今日も今日とて下校時刻は訪れるものであった。なぜぼっちが早く帰らないかというと、階段で松葉杖なんてついてたら邪魔だからである。こういう細かいところまで気を遣う、こんなことができる人はそうそういない。だから誰か養ってください。

本日5月14日、快晴。

中間テストもあと少し、というところ。高校の最初のテストは中学同様、簡単なものだろう。だから、誰かがノートを見せてくれなくても問題ない。と考えると事故をした時期は良かったのかもしれない。

……全然良くないな。

まあ最初のテストでいい点とって大半が調子に乗ってさようならという失敗を繰り返すリア充はよくわからん。

その点、勉強と読書とゲームと睡眠と食事しかしない俺はそれなりに優秀である。ん？待てよ。俺、わりとやってること多いじゃん！なにこれついに俺もリア充か

そんなことはめっさどうでもいい。そんなわけないだろ。だいたい、リア充になる気もないし。ぼっちとかマジ最強。ぼっち最強伝説とか書ける。なんなら最恐まである。

授業後の風（通称：リア充どもの会談）も既に去り、俺は一人、階段を降りる。

んにしても、未だに階段の昇り降りには慣れない。病院からは松葉は友達に渡して手すりに掴まってピョンピョンしていくように言われているが、友達とかいないし。そして、友達いないんですけど……なんていくらなんでも言えるわけもなかった。それ言って冗談だと認識されるほど辛いものもそうそうないだろう。な？ぼっちの諸君。

八幡「なっ………！」

しくった。誰かに呼びかけるなんてことないから気がそれてしまっていた。俺は誰に呼びかけていたのだろうか。

現状の整理をしよう。右手に持つ松葉が飛んでった、とまではいかないが、階段を滑り降りた。なんで俺より先にいくんだよ。お前は沢田君かよ。ほんと、なんであの時に置いてかれちゃったんだろ。いやまあ理由はわかってんだけどね？でもその時なんてわからなかったからすごいショックを受けていたことを覚えている………

「何を………」

八幡「え？」

冷たくも柔らかい、そして綺麗な声が後ろから聞こえて振り返った俺は、

「？」

……………。

「見惚れていた。ただ、見惚れていた。

長く、流れるように綺麗な黒髪。細く、ガラスのごとく透き通った肌。そして、それらを何倍にも見せるほどの、整った顔立ち。まさしく美少女という代名詞が適切な、少し首を傾げている、その少女に。

八幡「え、あ、その…えっと……………」

「かばんと松葉杖、持ってあげるから降りなさい」

八幡「っ……………あ、す…すみません……………」

そして俺は彼女に荷物を手渡す。 渡す よりも 手渡す の方が、
なんか、いいですね。

てか、学校でほんとに久々に口開いたんじゃないか？ 最初の頃は先生と少し話してはいたが（それでも少しだけなのかよ）……………

そのせいだろうか。それとも見惚れていた、いや、見惚れているせいか。言葉がうまく出てこない。もともと言葉を発すること自体が少ないが、それでも、こんなにも出ないことは今までなかった。

……………だが、それについて考えることは、すぐに辞めた。

つと、そんなことを考えている場合ではない。

そそくさと俺は階段を降り、松葉を拾う。

「はい」

俺は預けた荷物を手渡しで、手渡しで受け取る。

八幡「ど、ども……………」

「それよりも、危ないわよ？階段で松葉杖をつくなんて」

八幡「はあ……………それはわかっていたつもりだったんですが……………」

「こけたら大変よ。これからは気をつけなさい」

八幡「す、すみません」

「それじゃあ」

そう短く告げ、彼女は歩いていった。

早いな。まるで彼女は全然違う世界の人のように、俺の視界から消えていった。

というか、後ろにいたってことは俺のせいで進めなかったってことか。ほんと、すみません……………」

八幡「あ……………」

俺は思い出してしまった。彼女にお礼を言っていないことを。今からは、もう無理だろう。松葉杖で彼女よりも早く移動できるわけがない。それに、叫ぶという選択肢も普段から声を出していない俺は選べない。

そのうち言える機会はくるだろうか。きてほしいな、ぜひと。

記憶を掘り下げる。赤色だったよな、たしか。なら、言える機会は
いずれくるだろう。俺が覚えていても彼女は忘れているだろうし、そ
もそも人間関係を構築できていない俺に機会が巡ってくるかは別の
話なのだが…………

にしても、あんな美少女がいるという情報は流れないものなのか？
噂やらなんやらで聞きそうなものだがな。俺がまだ来ってから時間が
経ってないから聞こえてこない（もちろん盗み聞きですよ）だけか。

黒髪の美少女、ね…………

—————

本日5月23日、やや曇り。

やや曇りなんて天気があるかは知らんが、まあそれ以外で言い表す
のは困難であるほど、微妙な雲の量である。

この時季は太平洋側をじめつとした空気が漂う。そして気温の上
昇だ。夏の暑さプラス湿気、もはや夏は脅威でしかない。ちなみに、
この知識は中学の社会の地理でやった。だからよく覚えている。理
科の天候でもやったって？そんな、ハハハ、またまたご冗談を…………

登校のときももちろんいち早く学校へ行く。朝の忙しいときに階
段を松葉で占領とか邪魔なだけだからな。

教室では基本、読書をしているか寝たふりをしている。読書は純粹
に俺の趣味だな。最近はやガガーーーーいや、まあおもしろい本を見
つけたからな、はまっている。寝たふりに関してだが、決して夜更かし
をして、いかかわしいことをしているわけではない。それをするのは
リア充どものみである。だから、俺はしっかりと寝ている（だからっ
てなんだだからって。そんな接続詞で繋げるんじゃないよ）。よっ
て、決して寝ることはない。なら、なぜわざわざふりをするかって？
それはだな、周りに俺の存在を認識させないためだ。存在感を消す、

そのためには寝るのが一番なのだ。それプラス人間観察を行うときに最も適した体勢である。

それにしても、今日は本当に騒がしい。いや、理由はいくらなんでもわかるんだけどね。だって、明日からテストだもん。リア充どもがワンワン騒いでいる。騒いで自分やばいアピールとか本当にするさ。そんな暇あったら勉強しろよ。

それにしても、

……ワンワン、か。

—————

さて、今日も帰るとしよう。学校は本当に過ごしにくい。ついでにうるさいやつらは憎い。

階段も長いと感じていた最初と違って、今はもう慣れて、なんなら短くすら感じる。だが、慣れてきたと思っているときに事故は起きてしまうのだ。ほんの小さな緩み、油断が事故を生む。ドライバーの皆さんには常に細心の注意を払っていただきたいものである。

八幡「ん、しょ。よいしょ」

未だに声は出る。なんか出した方がうまくできそうな気がする。でも、省エネ主義者であるあの人はそれをやらなくていいこととしてやらないのだろう。あの考えって完全にぼっち向けだよな。友達いるし、フラグが完全にたっている美少女と過ごしてるし、俺とは全然違ってぼっちじゃないんだけど。世の中不平等であるとしみじみと思う。俺も省エネを頑張ってみよう。何が削れる？ 会話、はしてないから削れるところがない。呼吸、は必要。思考の停止、は削れそう。って、これ削ったら人間らしさが俺の中からなにとつなくなってしまう。それは防がねばならぬ……結論、俺は省エネで生きていく。なんと地球に優しいのだろうか。そろそろ国際連合（国連）は

ぼっち推奨を始めるべきでだろう。一人っ子政策があるなら独りっ子（ぼっちと読む）政策や、ぼっち推奨委員会とか、地球温暖化対策の仕方はいろいろとあるものである。

というどうでもいいことを考えて、テスト勉強で疲弊した脳を休ませること数分、ようやく下駄箱である。とっとと帰りたい。先週末では多少なりとも部活のうるさい音も響いていたが、いくらなんでもテスト前日は部活をやらならないらしい。あくまでらしいだけである。部活というのに関わったことなんてないから確かなことかはわからんから予想ではあるが。ま、聞く人もいなかったしな。

靴を履き替える作業もだいぶ身についた。いやー、最初は苦勞した。なにせ、怪我してない方の靴を替えるときなんて両足を浮かして松葉しか地面についてない状態だからね。それも今となっては単調な作業である。てか、周りに人がいないんだから、ざら板に座って履けばいいだけなんだけど、なんか座ってしまうと負けを認めてしまうようで、体が拒絶反応をする。一体誰に、何に負けるといっただろうか。ほんと、負けたくない相手もないっていうのは気が楽。座らない理由としては、座ったときに砂がつく、というだけだ。他意はない。でも何で砂をつけたくないんだろうか。砂くらい払えばいいんだし。まあ考えるだけ無駄か。

さて、帰って勉強でもしよう。とこころで、

……………明日ってなんのテストがあるんだっけ？

—————

結局何をやればいいかを思い出せなくて全教科やった。といっても理系はとる気ないし、文系をやったが、現代文は大丈夫だし、古文と社会と家庭をやっただけだ。律儀に副教科である家庭をやっているあたり、なかなか優秀である。ふくきょうかで漢字変換すると服強

化とか出ておもしろい。身近におもしろさは存在するのだ。ぼっちのたしなみである。てかこれ俺が変換してるわけじゃないな。

俺はいつもどおり、教室に一番に入ったわけだが、そこでとんでもないものを眼にしてしまう。

今日のテストに文系科目が一つもない、だと……

今日はやることはないではないか。文系科目がないとか世界の終わりだわー。

……はあ。

本日5月30日、曇天。

長いテスト期間も今日で終わった。土日を挟んだからやけに長いテスト期間だった。文系科目は、まあ想定どおりできたはずだ。うむ、中学と大してテストの感じは変わらない。理系科目？なにそれおいしいの？なんてことはさすがに言わないが、まあ察してくれ。

んにしても、どうしてテストが終わった後にリア充ってのは学校に留まるんだ？邪魔で仕方ないし、うるさいし。松葉で動いてたらそれこそ目立つし迷惑をかけてしまう。今日も帰りが遅くなりそうだ。

本日6月18日、雨天。

せつかくの記念すべき日だといつものになぜ今日に限って雨なのだ。まあなんていうことはない。だって今梅雨だし、雨が降って当然である。しかし、今日くらい晴れてほしかった。今日、足の完治が言い渡

された。長い間お世話になった松葉との別れを惜しむ。いやだって、ね？高校生活で一番近くにいたんだよこの松葉。そりゃあ惜しみたくもなるってもんですよ。もっと言えばこの松葉以上に接する人なんていないだろう。

……じゃあな、松葉。

松葉との感動的な、感動的な別れを終え、これで明日から毎日朝早く家を出る必要も、授業後静まりかえるまで待つ必要も、階段で一段一段気を張って昇り降りする必要も、なくなる。なんてー素敵なー日常ーでーしょー。

つつても怪我の影響でまだしばらくは運動するな、とのこと。それにしても、運動の定義がいまいちわからん。確か理科で呼吸とかも運動に入るとかなんとか習った覚えあるし。足に負担をかけるな、ということなのだろうが、そのくらいしっかり説明してくれないとぼっちのコミュニケーション能力じゃ理解できない。まあ俺はぼっちの中でもコミュニケーション能力を持ったぼっちだから伝わったものの、俺以外だったらほんとに呼吸止めるやつとか出てくるぞ。あれ、もしかして病院の人って対人スキルがないのか？

まあ、この時期ともなれば一学期終了に近づいたから期末テストを来週に控えている。そそくさと勉強に切り替えよう。今回は何日目にも何のテストがあるかをちゃんとわかっているから前回のようにとんでもなく無駄なことはしなくてもよさそうだ。理系のテストがないということになっていなかったのは何故だかわからない。理系科目、去れ……

そういえば、前回の国語学年一位と総合学年一位って誰だったんだろつか。貼り出されることもないこの学校ではそれがわからない。未だにそこらへんのうるさいやつらが噂とか立ててないし、俺の耳には届いていない。

それに、

Second / album

俺が始業式にあった事故の詳細について、語るとしよう。

天気は晴れ、雲もまばらにあって、非常に過ごしやすい天候だった。俺は自転車をこいでいた。おニューのママチャリである。スーパーの安売りで10000円で買った。こういうものくらい親に買ってもらいたかったものだ……

そして、車一台が通れば歩行者も止まらなければいけないというほどの道幅のところ、犬を散歩している少女がいた。犬に振り回されていたというんでも光景を残して。そして案の定少女は倒れた。

悪かったのは倒れた位置とタイミング。

倒れた位置が道路の中央じゃなければ、たまたま車が来るタイミングじゃなければ、そんな偶然が見事に合わさった。彼女は腰を抜かして立ててそうもなかった。車はその少女に気づいたが、ブレーキを強くかけたって間に合いそうもない。ちなみに俺はそんな厄介ごとに関わる気なんてなかった。だから無視しようとした。

だが、結果として俺は事故に遭っている。ほんと、ね。俺の体もいふこと聞かなくなってしまった。

ほんの、ほんの一瞬頭をちらついていたいつかわからない、どこかわからない、そのに照らし出される人が誰なのか、全てが謎に包まれた光景が、ちらついてしまったから、俺は動いたのだろう。少女は中学生くらいか、それより幼いか。とにかく小さく見えた。会話してないから知らないけど。車は高級車だと誰もが思う車であった。一体どこに金持ちだよ。ひかれたからその代償として俺を養ってくれればいいのに。俺一人増えたって変わらないだろうに。

……いや、だめだな。

『……だめだよっ』

一体誰の声なのだろうか。

本日7月19日、曇天。

テスト返しの喧騒もすでに過ぎ、終業式に臨む。てかなに、なんでリア充どもはたかだか一ヶ月会えないだけなのにいつも以上に会話してんの？そんな短い、つーが一瞬の別れすら悲しいのかよ。感覚おかしいだろ、どうせ連絡とか取り合っただろ。ほんと、意味わからん。なんてくだらないことを考え、時間を過ごす。それにしても、式のときの校長先生のお話は、校長先生のあたりはずれに影響している。いい校長だと聞いていてためになるが、悪い校長だと本当になにが言いたいのかわからない拳句に長々と時間をとる。現在の校長は後者である…………

長い長い校長先生のお話も終わり、我々生徒は各教室に戻るべく、足を動かす。てかお話の内容が、要約すると”部活と勉強頑張ってください”というもの。その結論のために20分消費とありえねえだろ。とつととホームルームやって、とつとと帰りたい。今日は両親が同僚にお呼ばれで帰ってこない。一人で自宅を満喫できるだなんて最高じゃないか。

まさか夏の課題があるとは思いませんでした。高校生にもなってそんなもん出されたって無駄だろ。課題やったって、そもそも勉強する気のないやつはやるだけ無駄だし、真剣に取り組むやつにしろそんな枷があったら万全の状態で勉強ができない。学校はもう少…………いや、もっと生徒のことを考えてもらいたいものである。やはり、学校というのは社会の縮図ということであっている。上からの言い分(世の中ではこれを命令という)は絶対だし、弱者は徒党を組んでやりすぎさなければいけない。徒党を組まないばっちは

やはり最強である。

なんていう感じに浸ってたらいつの間にかホームルームも終わって、生徒が下駄箱に流れていった。こういう行事のあとって最初にだーっと流れるからしばらく待機が正解。流れに身を置いて行動とありえない。周りに流されて行動するようなやつは信用できない。ま、俺は信用なんてされないから関係ないんだけどね。

本日7月26日、晴天。

……やばい。夏の課題が終わってしまった。いやほんとに終わってしまった。うんほんと、面倒なの以外が終わったとかじゃなくて、ほんとに全部終わった。やばいどうしよう。本格的に夏休みに目標がなくなった。いや、目標はあるのか。最近ブック・オンで大量にライトノベルを買ったからその消化作業がある。消化を消火にするととんでもなくかつこよくなることに気づいた。これも俺の国語力の成果だな。

実際のところ、予定より一日早く課題が終わったというだけのことだから大して俺のスケジュールに影響がない。あるのは明日に”課題終了”という文字を消してその日を真っ白にするという作業があるのだが、それでも大した影響ではない。あえて触れていなかったが、夏休みのスケジュールはそれ以降真っ白である。

本日9月1日、晴天。

おい、夏休みの行動はどうした。とかいう質問に対しての返答をあらかじめしておこう。
なんにもなかった。

罰ゲームで女の子が遊びに誘ってくれることも、親と一緒に旅行と
いうのも、本当になにもなかった。ちなみに親と一緒にと言ったが、
別に両親だけで行ったわけでもないので勘違いしないように。夏休
みの俺の行動だが、7時起床。ゲーム。8時朝食。食べ終わり次第勉
強。10時からゲーム。12時昼食。食べ終わり次第読書。14時
から勉強。……

説明が面倒になった。まあという感じに毎日同じことを繰り返して
いたわけだ。

始業式。それはこれからの憂鬱な日常に対して悲しむという日である
と同時に、今までの休みの反省を余儀なくさせられる日だ。しかも
校長先生のやたら長い話を聞かされる。校長の自己満足のために
生徒を使うのはやめていただきたい。心の中でそう祈る日である。
久々に会った友人(笑)たちとの会話を楽しんでいる騒がしいやつら。
別に俺は彼らを否定などしていない。騒ぐつと、喚ぐつと、それは彼
らの自由だ、人権が保障されている。俺が許せないのはあいつらの会
話の中身にある。いやほんととはもっとあるんだけどね。その中身と
いうのが、俺課題やってねーわーと自慢げにしゃべって、それに対し
て俺もだわーとか、そーれやばくね？とか課題を完全に会話のネタに
していることだ。話のネタにされたことのないお前らにはこの気持ち
ちはわかるまい。影で散々に言われ、さらに聞こえるような声でクス
クス笑う。これをされたときの精神的ダメージを知らないお前のそ
の会話はすごく不愉快だ。つまり俺は課題に同情しているのだ。

ちなみにそういったやつらの会話の中には明日から始まる実力テ
ストの話はなかった。存在すら忘れられてる実力テスト、俺みたい
で、ほんと、可愛いそう……

本日9月7日、雨天。

俺が一学期に見つけた昼飯を食べる場所、通称：ベストプレイスの場所は外。こんな天気では教室で食べるほかない。そうすると、本来は静かに食べなければ行儀の悪い食事も、騒がしい。だが、この日はこの騒がしさが功を奏した。よつやく噂やらなんやらが回り始めたというこの時期、学年一位を毎回、しかも全教科とっているやつがいるという情報が俺の耳に入った。そして、その人は女の子でさらに美少女だとか。J組だから縁なさそうだからチラリと見ておこう。噂が流れ始めたということは人だからできているはずだから、その女の子というのが誰かというのも容易にわかる。人ごみは利用の仕方によってほとんどでもなく役に立つことがあるということをいい加減、世の中のぼつちは覚えた方がいい。

思い立ったが吉日、すぐ行動に移すべし。

J組の近くに来たが、人ごみがすごい。学年一位というだけでも見にくくだろうが、それが美少女ともなればとんでもない人の量になるのは予想済みではあるが、やはり予想していてもあてられるな。いざ、臆せず前へ。

本日9月14日、晴天。

女の子は見たことのある人物だった。というか話したことのある人物だった。階段で助けてくれた女の子、黒髪の美少女だった。彼女が学年一位、か。これは、

八幡「はあ……………」

ため息しか出ない。あんな、中心人物に俺が近づけるわけもない。お礼は、言えそうにない。そんなことを考え、少し寂しく、悲しくなっ

た。まあでも仕方ない。元からそういう運命だったというだけだ。別にラブコメに期待なんてしていない。だが、彼女の見たあのときの柔らかさ表情を見ることができないというのが少し残念なのと、やはりお礼すら言えないのは、味が悪い。学年一位なんてちやほやされるのだ。つまり俺とは無関係で対照的な存在。だが、彼女の去り方は、そういう違う世界の人という感覚ではなかった気もするが。なんて、期待してるだけか。いい加減諦めも覚えないと。希望なんて世の中にあっという間ではない。そんなものを持っては、
……また自分に失望することになる。

本日9月22日、雨天。

今日は居残りで先生に呼び出しをくらった。なぜ呼び出されたかということ、あまりにも文理の点数に差があるから、ということだ。国公立にいきたいならまずいと言われたが、私立にいくと言ったらそれでも数学は頑張ってやれよと言われて返された。そんな帰り道。

紅葉も、少し夏の暑さを残す涼やかな風も、秋を感じさせる。秋という季節は実につぎつたい。気温、湿度、景色、その他諸々自然はいいものを提供してくれるのに、それに対して文化祭などの学校行事で地球を破壊する人間。まったく、なぜ地球に悪いことをするんだ。これだから複数で行動をする人間は。やはり国連はぼっち推奨委員会を作って積極的にぼっちを推めるべきである。

「好きですー付き合ってくださいー」

ちっ。せっかくぼっちを広めるための策略(妄想と読む)を練っていたのに。下駄箱で告白とかすごい度胸あるよな。誰に聞かれてるかわかったもんじゃない。ソースは俺。誰もいないはずの校舎、下駄箱で告白したら周りでソワソワ、コソコソ、ヒソヒソ、ククククとい

う声がしてきた。ククククとか絶対曹長がいるだろ。これわかるかな？

と、相手のお方は誰かな？ちなみに告ったのは男子。

「じゅめんなやじ」

学年で知らない者はいないだろう。学年一位の頭を持つと共に、学校一の外見を持つ少女。

てか返答が早い。秒も入らず、というか考える間もない返答。さらにすぐ帰っていった。そしてあの声の冷たさ。絶対零度を発した彼女は、彼女の声は、とても冷たかった。

それにしても、彼女の声ってこんなに、その、なに？柔らかさがなかったか？硬く冷たい、その声は冷酷と言って違いはない。こんな声での会話は記憶にない。

さて、そんな空気の中にいる必要もないので俺もとっとと帰るとしよう。

「なにあの態度」

「私の柏木君……………」

「何様のつもりなのよ」

そんな二人の声が陰から聞こえたことに関して、触れる気はない。

本日9月23日、晴天。

俺は今世紀（今月と読む）、最大の失態を犯す。

時計の針が停滞していることに気がつかなかったのだ。簡単な話が時計の電池がなくなったということだ。だから、怪我をしていたときと同時刻に学校に着いてしまっ。

だが、そのときと違う点がある。一つ目、当然のことながら俺の両手に松葉がないこと。二つ目、下駄箱に人がいること。この時間に学校にいるということは大して不思議ではない。朝練とかあるし。ただ、その人は、いや、人たちは三人で、なにやらかたまっで話している。

「これだよな？」

「これこれ」

「人がいないうちにやるっよ」

最後の人、ちょっといいですか？俺、ここにいますけど。まあ気にしないんだけどね。そんな会話があり、そのうちの一人が下駄箱を開けて中にある靴を取り出した。三人は靴を履いているためどう考えても違う誰かのだ。

てか、この時間に靴があるっていうことはもうすでに誰かがいるってことか。なんか、俺、恥ずかしい……………

ま、どうでもいいや。

—————

今日の授業も終わり、これから帰るところだ。とっくと帰るっついで下駄箱目指して歩みを進める。

……………ただなんとなく、今朝の靴の持ち主が気になって誰かくらいの確認はしておこう。特に意味はない。

十数分の後、靴の入っていない、つまり空の下駄箱を開けたのは、彼女、学年一の才女だった。その彼女は下駄箱を開けたあとにすぐ、反転をして進んだ。

俺は特に何かをする気はない。どうしてわざわざ好き好んで面倒ごとに巻き込まれなければいけない。関係のない人のためにわざわざ行動する気もない。関係ない人、ね。

…………… そうですね、今日ってこのあと特に用事ってなかったよな。そういえばまだ学校の探索ってしてなかったし。探索って心をくすぐるしな。

—————

たまたま、学校探索の過程で彼女の靴を見つけたから彼女の下駄箱に入れる。まあさすがに事情を知ってるわけだし。知らん振りをする方が無理やりだし。

あつた場所は人通りの少ない学校裏の茂みの中。昨日の雨のせいで草は濡れていた。まあ見つけてしまったもんだから取ってきた。俺の靴やズボンに泥も付いたし、結果としては損ばかり。持っていたタオルで靴の水分はできるだけ取った。靴は何も悪くないしかわいそうだからな。

言うておくが、学校裏には来たことなかったから来たただけだ。ここが隠しやすそうとかいう予想はもちろん立ててない。

さて、帰るか。外に向かって歩く。そのときに、

「……………ありがとう」

なんて小さな声が後ろから聞こえたが、俺には関係ないので、その声を響く足音でかき消した。

故意的に俺は靴を探したわけではないから恩は返した、ということにはならない、する気もないが、それでも、まあこれで借りた恩の利

息分は返した、ということだ。

彼女のことだ。これからは同じことをされないように対策はとるだろう。よかったですねっと。

帰り道は少し足取りが軽かったということとは、単なる気のせいだと思っ。自転車だしな。

Third / album

今回は入院生活について話すとしてよう。

入院期間は二週間くらいか？よく憶えていない。その間、家族はちゃんと来てくれた、3日に一度くらいのペースで。仕事忙しいから仕方ないんだけどさ……………

とは言うものの、俺が事故のあと目覚めたときには泣いて喜んでくれた。なんであそこまで感情が出ていたかの理由はまったくわからないが。

入院しているときにお見舞いに来たのは家族と、助けた女の子とその家族、車を運転していた人とその関係者の計7人。友達なんていない、どこるか今連絡のとれる人すらいらない状態。俺の価値は7人である。いや、むしろ7人も来てくれて俺は嬉しいんだよ？

車を運転していた人とその関係者は一度謝りに来て、親とお金関係の話をしていたらしいし、女の子とその家族に関して、俺は見えない。親から聞いたが、俺が寝てるときに何度も来てくれたということだ。会って話しくらいしたかった。女の子がかわいかったからとかそういうことではなくて。いや、かわいかったんだけどね。さすがに中学生に手は出さない。

ちなみに名前は“由比ヶ浜”というらしい。それ以外の情報といえば、髪が黒くておとなしめな感じだった。というくらいか。まああと、推測にはなるが犬にやられたってことは力自体はないのだろう。

車について話しておくと思塗りの高級車。これ以外の情報はないし、そんな車に縁がないんだからこれ以上の情報も得ようがない。

それにしても、ほんとよく助かったよなー俺。中学の柔道の授業で相手がいなかったから受け身をやりまくっただけのことはある。とは言っても片手に女の子を抱いて、さらに傷つけないようにバランスをとるのに必死で大した受け身はできなかった。結果助かってるんだからいいんだけどな。

本日10月2日、曇天。

文化祭の準備も最終段階に入った。校舎はその飾りで染まり、文化祭一色となった。クラスでの俺の役割といえば小道具の作成である。その小道具だが、飾るのは俺じゃないから作りっぱなしでいいあたり、かなり楽である。

今日は明日の文化祭に向けてどのクラスも盛り上がっている。うるさい。

今日は家に誰もいない。また同僚に誘われたとか。まあ俺も一人でいたいし、ちょうどいいんだけどな。

本日10月3日、曇天。

忌まわしき文化祭当日である。俺の当日の仕事は特にならない。仕事はしたくないが、一緒に回る人がいない以上、居場所がない。ベストプレイスですら、どこぞの奴らに占領されていた。

どこで時間を潰すか探していると、荷物の散乱している踊り場、階段の一番上に着いた。ちなみに屋上の扉がある。校則で屋上への立ち入り禁止というのはなかったはずだから、屋上へ行こう。扉を開ける。屋上に来たのは初めてだ。なんか、こう、普通だな。想像通りの広さ、想像通りのフェンスの高さ、想像通りの素材、そして想像通りの景色。全てが全て想像通りだった。

さて、床もいい感じの素材だし、ここで寝よう。晴れだと寝れないだろうが、今日陽は出ていない。寝るには適した環境だ。さて、眠たくなってきた……

八幡「ふあああ………」

よく寝た。ふむ、ここはなかなかいいな。なかなかいい、な……え？なんで？なんで？動揺が抑え切れない。いや、あのね、だってね。

……女の子が横で寝てるんだもん。

まったく状況が把握できてない。

顔の距離30cm弱。少し口を開けて呼吸。ゆっくりと肩で呼吸。制服が少し着崩れている。首とその周りの白い肌が見える。

あれ？わりと把握できてる。そして気づいた、この状況はまずいと。この場では撤退が最善手。逃げよう。

「……うん」

……あれ？私寝ちゃったんだ」

起きた。俺の勘が告げる、もう手遅れだと。てか、なんか見たことある人だな。どこで見た？

「ごめんね？それからありがとう、私が寝てたから起こささないでくれて」

違う違う。関わらないために起こさなかったんだ。

だが彼女は誤解したまま話を続ける。

「あー私、城廻めぐりっ、よろしくね。君の名前は？」

……なんだろうか。このポワポワフワフワしたほんわか雰囲気は。この屋上という空間が、彼女から発せられるほんわか雰囲気には包

まれる！

八幡「ひ、比企谷です」

「こういう会話は慣れない。話掛けられること自体慣れていないからというのが理由だが、それプラスに彼女が徐々に距離を詰めてきているというのが頭を混乱させる。」

めぐり「比企谷君、ね。よろしくねっ！」

八幡「よ、よろしくお願ひします……………」

軽い会釈をする。そのとき下をチラリと見て、彼女の履いているスリッパの色が緑ということがわかった。俺の一つ上の学年、2年生だ。

めぐり「ねえねえ比企谷君。こんなところになにしてたの？」

八幡「ええと、昼寝です」

めぐり「文化祭なの？」

八幡「やることないので……………」

学校で一番盛り上がる行事の文化祭でやることがないってすげえよな。自慢できる。する気もする相手もないけどな。

めぐり「へえ〜。あ！ならちょっと手伝ってくれる？」

八幡「なにをでしょうか」

めぐり「ちよつとした仕事を、ねっ」

ねっ、とかすごいかわいい。ほんわか雰囲気と合ってるし。いかにいかに、意識を戻さねば。

なんだろうちよつとした仕事って。掃除とかゴミ捨てみたいな雑用ならともかく、いや待てよ。人の死体の掃除とかゴミ捨てとかは無理だな。ならやれることないな。この先輩をなんだと思っているのだろう。

八幡「具体的にお願いします」

めぐり「うんとね、生徒会で私が担当してる仕事があるんだけどね。力仕事で、その、手伝ってくれない、かな？」

そんな上目遣いをしないでください。そういう行動が勘違いを招くんですよ。うっかり好きになっちゃうでしょうかが！

いや待て、聞き慣れん言葉が出てきた。生徒会？あ、そういえばこの先輩って、

八幡「……………もしかして副会長？」

めぐり「あゝ。やっと気づいてくれたね」

どつりで見たとあるわけだ。この間（一学期）演説会やってたな。前期生徒会副会長、名前は————あれ？なんだっけ。さっき名乗ってくれたのにな。

めぐり「それで、その、やってくれる？」

八幡「わ、わかりました。手伝いますよ、先輩」

めぐり「ありがとうー！」

八幡「それじゃ、ささっと済ませましょー」

めぐり「うんっ！付いてきてね」

八幡「わかりました」

さてと、これで俺は文化祭に貢献できるわけだ。イヤーコウエイダナー。

――――

八幡「そういえば先輩。どうして屋上で寝てたんですか？」

めぐり「えつとね、屋上からの景色を見てみたくて行ったらかっこいい男の人がいたから横から見てただけど、眠たくなっちゃって。それで、そのかっこいい人が起きたらいたんだけど、眼のせいで少し残念だった」

八幡「そうですか……………」

残念で。いや自分でも眼があれだってことは自覚あるから気にしないけど、ここまでストレートに言われるってのもどうなんだろうか。

めぐり「あー！ごめんね、その……………あ、あと文化祭がちょっと楽しくなくて。だから屋上に来たんだよー！」

八幡「いや、気にしてないんですよ。というか、楽しくないってどういことですか？すごい盛り上がりってますけど」

めぐり「ええと、まあいろいろあってさ。だから、私が来年会長になって、全員が楽しめる文化祭にするんだ！」

八幡「会長になれれば、ですよね？」

めぐり「そんな意地悪言わないでよ、比企谷君」

八幡「まあ、頑張ってください」

めぐり「うん！」

危うく惚れそうになる。そんな笑顔を俺に見せないでください。笑顔、か。そういえば彼女、学年一の才女の笑顔がかわいいという噂は流れてないな。まあいちいちそんな噂立てるまでもないことというだけかもしれないが。

……………それから、なぜほんわか雰囲気が一瞬なくなったのだろうか。

めぐり「比企谷君！今日はありがとね！」

いくつか少し大きめなダンボールを運んだだけだ。

八幡「いえ、大したことじゃありませんよ」

それに、そのおかげで文化祭の閉会式に並ばなくて済んだのだから、むしろありがとついでにしました。

めぐり「ねえ比企谷君。今日生徒会で打ち上げやるんだけど、比企谷君も来てくれない？お礼もしたいしさ」

八幡「いや、俺はそういうところに行きたくないですし、お礼もいらないですよ」

めぐり「お礼したいんだけどな」

ははは、と乾いた笑い声を奏でる先輩。ちっ、どうすればいいんだよ。

八幡「本当に気にしなくていいですよ。先輩は打ち上げ楽しんできてください」

めぐり「えっ？私行かないよ？」

八幡「……………はい？」

いやいやいや、打ち上げどころか言ってたじゃん。なんで先輩行かないの？もう忘れちゃったの？

めぐり「私、今の生徒会、嫌いなんだ」

思ってもみなかった理由だった。先輩が生徒会を嫌い？あんなにすぐ動いていたのに、あんなに仕事をこなしてたのに、あんなに頑張っていたのに。そんな先輩がどうして。なら、なんで先輩は生徒会に身を置いているんだ。

……………先輩の顔は暗かった。屋上や、ついさっきまであった柔らかな雰囲気はない。さきほど一瞬なくなったときに感じた空気だ。彼女は、一体どうしたというんだ。

八幡「どうして、ですか」

めぐり「ごめんね、それは言えないよ」

彼女の抱える闇だ。ただ単に生徒会の人が好きだとか、そういうつまらない話ではない。いや、嫌いなんだろうが、嫌いのレベルが違う。先輩の嫌いは、嫌いという言葉よりも、憎いという言葉の方が適切だ。

………こういう使い方はしたくないが、いた仕方ない。

八幡「先輩」

めぐり「な、なに？」

八幡「お礼、してくれるんですよね？」

めぐり「そうだけど」

八幡「なら、そのお礼は先輩が生徒会が嫌いな理由を教えるということ、いいですか？」

めぐり「比企谷君って、卑怯なんだね」

卑怯、か。俺はこれを卑怯だから使いたくないわけじゃない。もっと単純な理由だ。恩を与えたくてやった行動じゃないのに恩を返してくれる、というのが納得いかないだけだ。俺がその人に恩を与える気で行動したのならばその返ってくる恩は受け取るのだからって。

めぐり「うん、わかった」

決して納得した顔ではない。すごく嫌そうな顔だ。それでもいい、俺には関係ない。事実のみが必要なのだ。

めぐり「……………いじめが、起きてる、の」

いじめ。一方的に少数勢力を物理的に潰すことである。少数勢力は学校でいえば一人、多数勢力は三人以上のケースが多い。なぜ三人かという点、やりやすいからだ。少数勢力の人間はいじめから逃げない理由はいたって簡単だ。逃げられないのだ。いじめが生活の一つとして染み付くのだ。嫌だ嫌だ、そう思えば思うほどその呪縛は強くなる。そして、日々大きくなるいじめのレベル。少数勢力はそこから逃げるために自殺をする人が多い。だがいじめた側に罪はかからない。証拠がない、ただそれだけだ。いじめられている、なんて誰にも言えるわけがない。言えるようなやつはそもそも少数勢力に入る失態はしない。いじめから逃げ出す方法はもう一つ。無関心になることである。なにをされても、なにが起きてても反応をしないことである。反応がなくなればつまらなくなり、勝手にいじめはなくなる。だが、その考えに行き着くには多大なる犠牲が伴うことになるが。さらに実行するともなると、無関心の制御ができなくなつて、興味そのものを人に対して持たなくなるだろう。

めぐり「生徒会の三年生三人が、一年生の一人、を……………」

腕に力がこもり、体中が震えている先輩。今にも崩れそうな、弱い脚。声は震えて泣き声ともとれるほど湿った声だ。

おそらく、この先輩は何かやろうとしたのだろう。だが、先輩は無力だった。止めることもできないし、先生に言ったところで相手にしてもらえなかつたんだろう。

めぐり「一年生は、生徒会にも、関係ないのに……………」

八幡「名前は？」

めぐり「えっ？」

八幡「主犯の、名前は何て言うんですか」

めぐり「会長の、田中、先輩」

八幡「わかりました」

めぐり「ち、ちょっと！何する気なの！私が、私がやるから何するか、教えてよ！」

助けたいという気持ちは本物なのだろう。無力な自分に失望も、絶望も、全てを味わったんだろう。それでもなお、いじめをどうにかしたい。そんな優しい先輩に、何かさせるなんてことはできない。

八幡「俺一人でできることですから先輩は手を出さなくていいですよ」

めぐり「嫌だよ、そんなの。私が止めないと、だめなの」

八幡「先輩はそのいじめられてる人を守ってあげてくださいよ。俺が止めるのは主犯だけです。あと二人はどうしようもありませんので」

めぐり「うん、わかったよ」

……………嘘は胸が痛くなる。

—————

本日10月5日、晴天。

文化祭のパンフレットに会長である田中の顔やクラスが載っていたから目的の達成は容易いな。それにしても、俺がここまで動くとは。いじめという言葉に反応をしたのだろうか。自分がされたことがあるから動いた？そんなばかな。俺の性格上、俺の遭った嫌なことは他人も遭ってしまえということを思うはず。なら、なにに反応したんだ？先輩に一目惚れ？充分ありえるから困る。いや、一目惚れでなくとも普通に好きになったとか。それが一番可能性が高いが、なんかパツとしない。まあいいや、ひとまずその話は置いておこう。集中集中中。

おっと田中がクラスから出てきた。さてと、シャーペンはどこだったかなとポケットを探る。

八幡「いつけね」

シャーペンを落としてしまった。あーこれは大失態。いやはや恥ずかしい。

落としたのは先輩の前。

………いいタイミングだ。

田中「痛っ」

おいおいどーしたんですか？突然叫んで。まあどれもこれも、

俺がやったことなただけだな。

簡単なことだ。シャーペンを拾って立ち上がるときに田中の足を

かけて転ばした、ただそれだけのことだ。

八幡「あ、どうもすみません」

田中「てめえ、土下座して謝れ」

八幡「それでは失礼します」

軽く会釈。俺ほんと礼儀正しい。こんなやつにも会釈するとか。

田中「このやるー！」

八幡「ぐはっ」

鳩尾にグー入れてきやがったこいつ。鳩尾は呼吸を止めるボディブローだぞ。シャーペン落としたよ、殴られた拍子に。さて、ここからが俺のターン。相手が暴力に打って出たのだ。さて、俺も次の行動に移るかな。

八幡「先輩」

田中「なんだ」

八幡「ストレスか何かですか？いきなり殴ってきて。情けないですね」

田中「んだと」

八幡「それじゃ、先輩さようなら」

ちやちやっと逃げようそうしよう。逃げ切れれば俺の勝ち。めぐ

り先輩の悩みも解決。完璧だ。

さて、逃げ切ったことだし、俺への被害を最小限にとどめる努力で
しよう。幸い、今日は文化祭の片付けということで授業がないから
大した荷物はない。

スリッパを袋に入れていざ帰らん。まああれだな。田中が奇妙な
人脈を持つてなければいいんだが、たぶん大丈夫だろう。いくらなん
でも始まったばかりの学校生活、目立ちたくはない。

10月13日、曇天。

今日はいい感じの天気ではあるが、午後から雨予報。だから電車で
来た。午後といても夕方を少し回れば止むらしいが、まあ念のため
だ。最近はどこどこで寒さを感じるようになっており、もうすぐ
冬なのかと憂鬱になる。

田中を引っ掛けて一週間。毎日毎日朝から下駄箱に張り込みをさ
れている。まったく、よく懲りないものだ。むしろ感心する。いやし
ないな、そんな労力の無駄使い。だが俺は一度も見つかっていない。
もともと常時発動スキルの存在感を消すものがあるから見つかりに
くい、さらに相手の隙を見て行動してるから見つかるわけがない。
ミステイクションとエンペラーアイを同時に使ってるみたいなの
だ。バスケ始めようかな、いややめとこう。チームプレイが俺にで
きるわけがない。

今日の授業も終わり、現在雨が降っている。空を長年見続けたからわかる。今日は止まないな。だが、あと一時間で弱くなるな。なら待ってしよう。ほんと自転車であなくてよかったー。

ほんとに一時間で弱くなったよ。つっても自転車で帰れるかと問われたら無理と答えるけどな。

そんな日の帰り、下駄箱に知り合いがいた。

文化祭の日に屋上で話したあの、ええと、ほんわか先輩だ。名前が出てこん。しかしなんだろう、突っ立っていて、さらに傘を持ってないってことは忘れたのか？なら声でもかけて傘を貸すか。幸運なことに誰も周りにはいないし。話しかけようと、近づくと、

めぐり「やっぱり頭の回転がいい人って雨が弱くなることもわかるのかな。それとも、見え方が違うのかな」

いきなりなんの話だ？誰に向かって話してるんだ？俺には見えないなにか、かな？妖とか見えるってことか先輩は。とんでもない方向に予想が飛んでったな。

そして先輩は、ゆっくりと振り返る。

めぐり「ねえ、比企谷君」

屋上で感じたほんわかな雰囲気でも、いじめのことを話していたときのような暗い雰囲気でもなく、ただ冷たい表情で、彼女はそう言った。

Fourth / album

めぐり「ねえ、比企谷君」

八幡「何してるんですか？こんなとこ……」

めぐり「比企谷君、田中先輩に何したの？」

こちらの質問には聞く耳持たず、か。ここで無視して帰ってもいいんだが、どうしたものか。何したって聞かれても困るんだけど。

八幡「何もしてませんよ？」

これは明らかかな嘘。だが、胸が痛くなることはない。なぜなら、向こうも嘘だと知っているから、わかっているから。お互いに嘘だとわかっていれば痛むことはない。先輩の、目が、態度が、それをわからせてくる。

ちなみに、俺は嘘が好きだ。善人者を騙す嘘は嫌いだが、悪人者を騙す嘘は好きだ。この世の中の大半の人間が悪人者だ。俺は悪に嘘をつく時は胸が痛むことはない。しかし、今日の前にいる先輩は、

……善人者なのだ。

めぐり「質問に答えて」

八幡「こかせたんですよ、足を掛けて」

めぐり「それで？」

八幡「何がですか？」

めぐり「それじゃ、先輩は攻撃の対象を変えない」

先輩はそう言葉を発したが、目が俺を刺す。言葉なんていらないういほどに、その目は語る。ほんとは先輩は言葉を発してなどいなかったかと思うほどに、その目は訴える。

八幡「質問には答えました。俺は雨が弱くなってるうちに帰りたいんで、もう帰りますね」

そう言い、俺は先輩の横を通る。通るが、通り切れなかった。先輩の右手が、俺の右袖を掴んだ。かわいい女の子に袖をキュッと掴まれるのは非常に嬉しいが、この状況でやられても困るだけだ。振り払うのはあまり好きではないが（したことないけど）、致し方ない。

だが、俺は気づいてしまった。下唇を噛んで悔しそうに、そして泣き崩れそうな表情を。目に溜まる涙に俺の眼を含み顔を映している。掴んでいる袖も小刻みに揺れている。

めぐり「……………なんで、どうやったの……………」

歯を強く噛んで、そう言った先輩。もう力はなく、袖も揺れなくなって、彼女は崩れ落ちていた。

ちっ……………

八幡「先輩、傘、忘れたんですか」

めぐり「……………忘れたよ」

八幡「傘入って行きますか？俺電車なんで駅に行きますけど」

めぐり「……………あ…えつと…よ、よろしくお願いします……………」

そんな申し訳なさそうにされても困るんですが。

まあ先輩も、俺と帰るってことは何か話すと思っっているのだろう。俺も先輩にあんなことされたせいで話す気になったから、それでいいんだが、あれだね。

……………女の子と同じ傘に入るってすごいことしてるよね。

—————

道中

学校から出たが、俺も、そして先輩も、口を開くことはない。先輩は俺が話してくれるのを待っているのだろう。俺は話すタイミングを計っている。

信号が変わる2秒前。

これがベストだ。実際はいつだって変わらないのだが、俺の精神の問題だ。誤魔化しや嘘は動いてないときれいには出てこないからだ。おそらく、違う動作でもしながらじゃなければ言葉がないのだ。万が一、嘘をついたり誤魔化したりするときのため。

右手に持つ傘が粒を落とす音を聞き取れ、その不定期に聞こえていたリズムは一定になっていた。

そのときは、ベストなタイミングは、来た。なら話すとしてよう。

八幡「シャーペンを落としていきました」

めぐり「うん……………えっ、それだけ？」

八幡「俺の名前付きの、ですけどね」

めぐり「本当にそれだけなの」

先輩。同じ傘に入っていてただでさえ顔やら体やら近いのにさらに近寄らないでください。髪の毛がふわっと揺れてシャンプーの匂いが嗅覚を刺激するんですが。うわぁー、いい匂いだー。うんうん、邪が大きくなってきてやばいな。けど、先輩さっきまで涙溜めてたから目を赤いし、頬をほんのり赤みを帯びてるし、仕方ないよね。

ふうと一息ついて、これから話す内容をまとめる。と同時に間を作る。息と間は精神を落ち着かせるのに適した行動だよな。

自分のやったことのネタを話すのは嫌なんだけど、先輩は逃してくれないんだろうな。どこまで話すか。全部でいいか？

八幡 順番に説明しますね。俺が先ば、ええと、田中のクラスに行つて田中を怒らす。それによって興奮状態にします。それで一発殴らすわけです。鳩尾に入れられたのは予想外でしたが。公衆の面前でそんなことをした田中は軽いパニック状態が追加。俺がすぐ逃げたせいで目標物の損失。だがそこには俺の落としたシャーペンがあり、名前もある。これでチェックです。精神の不安定な田中はそれを拾って報復に来る。これでチェックメイトです」

我ながらよくまあこんな長い話が出来たものだと思ってる。やりた。まあ褒めるんだけどね。しかし、振り返ってみるとけっこう運要素に頼ってたんだ。成功したからいいんだけど。

それから先輩、いい加減口を閉じてください。驚いてる時間長いですよ。

めぐり「そんな方法、よく思いついたね……………」

感嘆を表している先輩。そんなに驚かれるほどのことでもないと
思うのだが。まあでも、ひらめきには運がからんでくるって言うし、
あながち否定もできないか。そもそも、このやり方は最善ではない解
決手段だし、いや違うか。解決したわけではないかもしれない。今は
俺を標的にしているが、いついじめられていた一年生に標的が戻るか
もわからない。なら俺は標的が戻らないようにちゃんと攻撃を受け
る必要があるんじゃないのか。策に相手をはめて、いい気になってた
だけじゃないのか。一体、俺は何をしていたのだろうか。まあだが、
相手が三年生である以上、これから何か問題を起こすこともないだろ
うから、今回はたまたま大丈夫なのであるうが。

八幡「普通は思いつかないんじゃないですか？」

めぐり「比企谷君は普通じゃないってこと？」

八幡「普通だったら文化祭なのに屋上で寝たりしませんよ」

めぐり「ほんとだねっ」

ふふつと笑い、先輩は笑顔に戻った。あの、ほんわか雰囲気だ。彼
女の持つ、彼女特有の雰囲気、空気。世の中の闇を受け止めることも、
受け入れることもできない、そんな彼女の本来の雰囲気。俺は、そん
な空間にいることは、まあ、

……嫌いではない、な。

めぐり「あ、駅ついたね」

八幡「そうですね」

めぐり「傘ありがとねっ」

八幡「いや、まだ帰り道あるでしょ。先輩が降りる駅から家までずぶ濡れになっちゃいますよ」

めぐり「えっ 家まで送ってくれるの」

八幡「勘違いしないでくださいよ。俺を待ってたせいで傘を学校から借りられなかったんでしょうから、その責任を果たすだけですよ」

学校には傘を貸してくれる機関がある。生徒指導部だったか、確かそんなところだ。俺が知ってて生徒会にいる先輩が知らないわけもないし。だが、俺を待っていた先輩は借りてる時間すらなかった。俺がいつ帰るかなんて、わかるわけがないからだ。先輩の立っていた足元の砂や泥の量などからそういいう推測が立てられる。あくまで推測だから事実ではないことも、もちろん考えられるが。

めぐり「優しいね、比企谷君は」

八幡「責任であって優しさではないですよ」

めぐり「それでもいいよ」

八幡「先輩、どっち方面ですか？」

これ以上先輩のほんわか雰囲気の中で、先輩のペースで、話なんてしてたら余計なことまで話しそうになってしまう。俺は関係ないこと、かつ必要なことで話を遮断した。

めぐり「私こっち方面だよ」

八幡「わかりました」

いやはや助かった。いくらなんでも真逆の方向とかだったら心が折れてた。という考えが浮かぶということは、けっこう無責任な発言をしていたということになるな。

車内はいい時間だったらしく、かなり空いていた。だから俺と先輩は隣り合って座る。ちょこん。

めぐり「比企谷君」

八幡「なんですか？」

めぐり「ごめんね。それから、ありがとう」

文化祭の日、屋上で初めて言葉を交わしたときのような、そのときと同じような笑顔で、先輩はそう言った。ようなというのは、先輩が他人に見せる顔ではなかったことだ。親しい人に、仲の良い人に、向ける顔と言葉のリズム。彼女の空間に吸い込まれてしまいかねない。体の中から高い温度を発し、血をはやく巡らせる。それは、少し寒かった車内での温度調節をするかのごとく、全身に流れる。

俺は返事の代わりに眼を瞑り、顔の向きを直した。

静かな空間は、俺は好きだ。好きだ。できることなら誰かといるときも、静かな空間に苦痛を感じず、むしろ心地良いと、そう思いたい。そう思える人と、一緒にいたい。だけども。

……先輩、なんで寝てんすか。

頭を傾けて俺の肩に頭を任せる。それだけならまだいい。いや、いいわけではないのだが、そんなことよりも、大きいことがある。先輩が、

俺の腕に、両腕を、絡ませてる。超柔らかい。制服は俺も先輩も半袖。肌が密着して、そよプニプニした感触を俺の腕に伝える。てか先輩、柔らかいんですけど。先輩は着やせするタイプなのか…なんてものすごく貴重なゲフンゲフン。今現在必要ではない情報が手に入った。結論、心臓の鼓動がやばい。じゃなくて、先輩がどこで降りるかわからないから起こしようがない。どすんのこれ。

という結論があつたが、先輩の胸ポケットに幸運なことに生徒手帳が入っていた。これは幸運だね。……………二つの意味で。

それでは先輩。生徒手帳取りますねー。ニヤニヤ……………

すーっと手を伸ばす、先輩の胸に。間違えた。先輩の胸ポケットに。生徒手帳をどうやって取るうか。できる限り親指と人差し指を広げて当たる面積を……………

は！いかんいかん。欲を捨てる、比企谷八幡。ここは公共交通機関だぞ。寝ている先輩に手を出せば俺は社会的にまずいことになる。今は諦めておとなしく生徒手帳だけを取ろう。今はってなんだ今はって。

ふむふむ。この住所だと俺の降りる駅の一つ前か。んで、あと2駅。起きるかな？

めぐり「んう……………あれ……………？私……………」

目を擦りながら先輩は目を覚ました。なんなんだこのほんわか雰囲気は。起きたときからこんな雰囲気を作れるのか！さすが先輩だ！屋上でもこんなだった！

八幡「あ、起きましたか」

めぐり「うん。……………えー」って私の降りる駅過ぎちゃってるよ

「！」

八幡「あれ？そんなんですか？」

めぐり「そつだよー！………もしかして、私が寝てるから起こさないでくれたの？」

八幡「いや、城廻先輩がどこで降りるとか知りませんよ」

めぐり「そついえば言ってなかったね。比企谷君っていつ降りるの？私もそこで引き返すよ」

八幡「俺も過ぎましたよ」

めぐり「やっぱり起きるまで待っててくれたの？」

八幡「いや、俺も先輩見てたら眠くなっちゃってですね」

めぐり「はははっ。私の寝顔見られちゃったんだ。どうだった？」

八幡「どうって、なにがですか？」

めぐり「かわいかった、とかそついう感想」

女の子にそんなこと聞かれるとかなんなんだよ。なんて返すの？先輩のことだからここでかわいかったですって答えても問題ないと思うが。先輩、寝起きだから体温上がってるのはわかりますが、頬を赤くしないでください。よし、俺の答えは決まった。

八幡「先輩。駅着いたんで引き返しますよ」

めぐり「えっ、ちょっと待ってよ比企谷君」

こうやってほかすのが一番だ。

それにしても、先輩に嘘をついたわけだが、気を使わせるよりはいいよな。たぶん、許してくれる。

……………だれにだ？

—————

めぐり「あ、私ここで降りるよ！」

八幡「わかりました」

めぐり「比企谷君はどこなの？ けっこう遅くなっちゃったけど、大丈夫？ 家の人とか心配しない？」

八幡「親は今日も残業らしいんで大丈夫ですよ。それに、ここの一隣ですから大して問題ないです」

めぐり「そっか！ ありがとうね」

八幡「んじゃ、とっとと帰りますか」

めぐり「うんっ！」

もうだめだ。ほんわか雰囲気体が体に染み渡る。この空間、温泉なんかよりも体への浸透度がすごいと思う。なんか眼腐りがなくなってる気がする。気がするだけだけどね！

城廻先輩の家はさっきスマホのアプリのなんたらマップで調べたが、駅から徒歩10分もかからない。ほんとに大した問題じゃない

な。しかも、俺のだいたい家側に10分だから降りる駅を間違えた感覚で問題ないし。

めぐり「あっ、そうだ！比企谷君、メアド教えて？」

メアド？メアドってなんだ？脳内で検索かけるから少し待ってて。ふむふむ。うむうむ。ほほう。メールアドレスの略か。普段聞き慣れない単語だといちいち検索かけないといけないから面倒だな。いつぐらいに聞いた？

まあいいや。んじゃ、教えるのは損がないだろうし（城廻先輩の場合に適応）、いいか。ということで、俺はスマホを城廻先輩に渡す。

八幡「ええ、いいですよ。はい」

めぐり「パスコードかけてないんだ……………」

八幡「俺のスマホ触る他人いませんし」

めぐり「落としたときとか危ないって思わないの？」

八幡「落としたらそもそも終わりだと思ってるんで」

めぐり「しっかりしてるね……………はいっ。ありがとうっ」

八幡「どうもです」

城廻先輩が「ふふっ」なんて笑って、「こっ続ける。

めぐり「比企谷君はやっぱり優しいね」

八幡「メアド教えただけで優しいってどういことですか……………」

めぐり「別につ、気にしないでいいよ。それじゃあ、帰ろっか。よろしくね」

八幡「わかりました」

俺は傘をさし、城廻先輩を入れて進む。彼女の指示に従って道を進む。雨の勢いはなんとなく学校を出たときよりも弱くなっていた。

めぐり「あれ？雨、止んだね」

八幡「あ、ほんとだ」

駅から出たすぐに止んだ雨。今日の天気は誰の心を映していたのだろうか。

めぐり「止んだからもういいよ」

八幡「あ、じゃあ。わかりました」

めぐり「ばいばい比企谷君」

八幡「ええ、さようなら。城廻先輩」

めぐり「これからもよろしくねっ」

俺の知る最高の笑み。それに、落ちるのに出遅れた太陽。彼女の、夕陽に照らされ染まった顔。雨上がりで道路の水たまりが、夕陽を反射させ彼女の頬をより赤く照らす。屋根が作り出すリズムもきらりと光る。少し吹いた風は心地よく、冷静な頭で、この情報を見させる。この場を支配した彼女は、自身をより美しく魅せる。そうした綺麗な

彼女は、俺の鼓動をよりはやくする。

八幡「ええ、また」

そう短く告げる。夕陽のせいで顔は熱く、はやく帰りたい。俺は城廻先輩との別れを惜しまずに足早にその場を離れた。

……いじめられてた一年生の名前聞きそびれた。

――

比企谷君と別れて私は帰る。帰ろうとしたのに、私は彼から目が離せない。

頭に浮かんでくるんだ。

比企谷君のついた優しい嘘。何も言わなかった、彼は優しい。

めぐり「ふふっ」

思わず溢れてしまう笑い。ほんとには私の降りる駅を知っているのに。彼のスマホの履歴に私の住所があった。なんであるんだろうって思ったけど、すぐにわかった。私の生徒手帳の向きが変わってる。それでわかった。いじめのことを話したときもそう。一年生を守って、なんて言ったけど、比企谷君があんなことした？だからその一年生に被害がいくわけないのに。ほんとに優しい。捻くれた優しさを持つ彼。なんだか、今日は陽が落ちるのが遅いみたい。気温が下がらないから体温が下がってくれない。それどころか、体温が少し上がった。10月なのに、暑いな。

さあ私も帰ろう。

……なにもない、誰もいない、私の家に。

本日10月31日、晴天。

文化祭が終わり、続く体育祭も終わり、そのあとの中間テストも今日、終わりを告げた。明日からは11月だ。しかしながら、11月は修学旅行がある。いや、一年の俺にはないのだが、そのときに一年と三年には遠足たるものがありました。少し遠出をするんでございませよ。クラスごとに行きたいところを決めて、1日消費して行くんだが、行くくらいなら授業の方がいい。面倒で仕方ない。なんで平日にそんな遠出をせにゃならんのだ。じゃあ休日ならいいのかって？ いわけないだろ面倒くさい。んで、その遠足でどこに行くかを今クラスで決めている。テスト終わったんだからとっとと帰させるよ。こちとら疲れとんじゃ。勉強してないリア充どもと違って勉強に力入れとんのじゃ。とは言っても、俺は意見を言わないし、聞かれない。音を出さないから進行の妨害にならないし、他人の意見に反対しないから円満に進むことができる。今日もみなさんは仲良しごっこに励んでいる。てか、進行役が私情を持ち込むとかおかしいだろ。お前のおかげで遅くなっただよ。ほんとね。どこにでもいるよね。進行役を勝手出たのに私情を挟んで友人(笑)と話し始めたり鼻糞したり。はやく帰りたい。

Fifth / album

遠足と聞くと、どうしても小学生が手近で広い公園に弁当を食べに行くというのを連想してしまうが、高校の遠足はちと違う。まず交通手段。徒歩の小学生に対して、我々高校生はバスである。貸切である。そして、次に距離。小学生は手近だが、1時間くらいかけて行くのだ。さすが高校生。そう考えているリア充たち。

結論。なにが違うんだー！やっつてること一緒だろー！叫びてー！叫ばないけど。とまあ、こんな考えはリア充の皆様にはないわけで、純粹に楽しみにしているのだろう。ふっ、愚か者どもが。

ただ、バスというのは非常にまずい。俺と隣、という人がかわいそうというのが大きい理由だが、そもそも隣にいない可能性も十分にあるからそれにかける。なんにせよ、一番まずいのはあまりものとして空いているところにランダムに入れられることだ。みんながわいわい騒ぎたいのに俺がその近くにいてしまうからその人たちは遠慮する。精神的に俺がきつい。クラスに溶け込んでいる俺にとって（もちろん空気という意味ですよ）、そういう俺が原因で何かが起こるのは、きつい。

だが、今回は事件が起こった。

「あ、あのーひ、比企谷、君……………」

机に突っ伏していた俺に声がかかる。明るい声だ。それでいて元気めな声だ。さぞかわいい女の子なのでしょう。

てかあれ、もうみんなバス決まったのか。早くないか？こういうのってやたらめったら時間かけるもんでしょ？そしてその時間中に決まらなくて、担任が持っている授業を一つ消費して決めるんだよね。その間俺はやることないから自習。幸せ。

まああまりが決まったとなればあとはそこに名前を書くだけだし、

少し動くとしますかね。あまりものには福がある、ってね。今まであったことないけど。

あれ、なんか急に寒気が。遠いんだけど、どこからか、冷気が飛んできた。寒っ。

あ、そんなことよりも返事をしなければ。

八幡「わかりました」

ここでどうしたなんて聞けば、それに対する答えを相手に言わせてしまう。俺にわざわざ話しかけて来てくれた人に俺と会話だなんて、そんな罰ゲームを味あわせるわけにもいかない。だから相手が言わんとすることを先に答えておく。こうすることで相手の人はすぐに俺の近くという危険地帯から安全地帯に戻る。……………言ってるんでこんなに虚しくなるんだろうか。

「えっ……………？な、なにが、なの……………？」

あれ、違ったのか？これ以外になにが解答としてあるというんだ。仕方ない。相手の人には悪いが、面と向かって会話をしよう。ごめんね。

と、相手を見たら、そこには美少女がいた。と思っていた時期が一瞬ありました。かわいい。すごいかわいい。かわいいのに、なのに、制服が男子用だ。頭真っ白。はははと渴いた笑いが脳内を駆け巡る。いや、そんなことは今必要じゃないんだ。落ち着け。

八幡「あれ、違いましたか。ええと、何の用でしょうか？」

よし、声が出た。クラスで声を発するとか超久々。自己紹介したとき以来じゃないか？という感じに、ほんとに久々である。だが、語勢が心配だ。俺の眼の腐り加減的に少しでも強くなってしまうおもの

なら相手を怖がらせて、泣かせて、クラスからの一斉砲火が俺を待っている。そのときに先生は絶対味方にならないからね、どこるか完全に敵軍。俺に味方はいない。おっと、過去の闇が俺を包みきる前に意識を戻さねば。

さてさて、目の前の人の反応は、っと。

「あの……バスの、席……と、隣……いい、かな……？」

なん……だと……。

あ、あれか。幻聴か。いやー危ない危ない。変な勘違いをしたらだっただぜ。

と、頭の中がすつきりしたところでまた口が開いた。

「隣、だめ……かな……？」

聞き間違いじゃない、だと。し、しかもなんなんだ。上目遣いで見ないでください。腐った眼に毒です。

……てか、誰？

八幡「え、俺ですか？」

「う、うん……」

上目遣いと目そらしを交互に行う目の前の彼。はたして彼でいいのだろうか？一応、彼（？）としておこう。

八幡「あ、はい。いいですよ」

「あ、ありがとうございます」

ほっと彼（？）は撫で下ろした。

ぐっ……………なんなんだこの破壊力は。もうやばい。なんか、とてもやばい。だつてさ。お礼を言って黒板に名前を書きに行くときに小さく「やった」って呟くんだよ？もうやばいよ？

黒板を眺めていたら（断じて彼（？））を見ていたわけではない。そりやあたままたま視界に入ってるわけだが、べべ別にガン見とかしてないし？）、比企谷の隣に、戸塚と書かれた。戸塚というのか。なんであんなに字うまいんだろう。なんであんなに腕細いんだろう。なんであんなに肌白いんだろう。なんであんなにかわいいんだろう。なんであんなに……………

やばい。ほんとにやばい。頭でなんでが90%以上を占めていた。そんな邪念を取り払う。ひとまず素数でも数えて落ち着こう。ものすごくベタではあるが。それよりもさ、

……………素数ってなに？

「じゅん、よろしくねっ」

いつの間にか彼（？）は書き終えて俺の目の前にいた。

八幡「お、おう。よ、よろしくお願いします。戸塚さん」

そう言つとよりすごい笑顔が飛んできた。眼があ、眼があ————

彼（？）はテトテトと自分の席であろう机に戻って行った。

……………なんの眼？

—————

本日11月2日、晴天。

見事な遠足日和である。雨でも中止にならないこの遠足、超しんどい。今更雨が降られても困るんだけどさ。

バス酔いはないから俺は読書で移動時間、かつレクリエーション、かつつるさい時間を過ごす。

なんでこういうときにレクリエーションなんてやるの？簡単に考えてもみる。移動中に体力を使うんだぞ？これから遊ぶなくなるだろ？まあ俺は遊ばないんだけどさ。ほんと、遊びに対するリア充の体力の多さはわけわからん。人類の不思議の一つだ。俺は非常時に備えて体力を使わない。遊ぶのが面倒だとか、遊ぶ相手がいないだとか、そんなことは関係ない。関係、ないんだからね！

つるさく過ごすのもレクリエーションと同様の理由でわからん。てか、迷惑。もっと周りを見てみる。迷惑極まりないだろ。腐った眼を持っていてる人に言われたくないって？知ってるよ、そんなこと。

んで、まあ、俺も実はそわそわしている。別に遠足が楽しみだからじゃない。

………いつもいない隣に人がいるというのはどうも落ち着かないからだ。

八幡「ねえ戸塚さん。なんで俺の隣を選んだんだ？他に人いるでしょ？」

戸塚「迷惑、だった………？」

だからそんな女の子みたいなかわいい動きとかしないでくださいお願いします。

八幡「迷惑じゃないけどさ。俺クラスで影薄いじゃないですか。そんなやつと隣ってというのが、どうも………」

かなり遠回しな言い方だなーと思う。存在感がないとはつきり言

わないあたりが。自分を貶すの超得意。他人を貶すのも超得意。俺ってすごい。

戸塚「なんと、なく……だよ。比企谷君、優しそうだし、仲良くでき、そう、だった……から……」

そわそわもじもじ彼(?)はする。というか、優しそうってなに？俺のどこに優しさがあるのだろうか。そもそも、この眼、腐った眼を持つてるやつが優しそうってのは世も末というやつか。

俺の優しい要素？俺が口を開かないから周りに迷惑をかけない優しさ。なにこの優しさ、めっちゃ重要。

八幡「そう、ですか」

戸塚「うんっ」

なんでそんなかわいいんだろう。これが女の子だったら速攻で告白して……いやしないな。そもそも話しかけられるわけがないな。危ない危ない、変な仮定と妄想で頭が潰れるところだった。クールダウンだ、比企谷八幡。クールになれ……。

別に女の子とか関係なく告白すればいいじゃないか。……やばい。考えがぶっ飛び始めた。

八幡「はい、ゆっくり深呼吸してください。吸ってー、吐いてー」

別に妄想の世界で運動してるわけではないということとはあらかじめ言っておく。

俺は隣の彼(?)の背中をさすっている。

……戸塚さんが車に酔った。

吐きはしてないからこちらへの被害はないが、吐かないというのは当人にとってはきついものだろう。

八幡「吐けるんなら吐いた方がいいですよ」

こんなかわいい子の吐くところは見たくないな。言ってる気づいた。というか、吐いたら完全に俺患者じゃん。クラスからの一斉放火がまってる。一斉放課なら嬉しいんだけど。

戸塚「あ、ごめんね。もう、大丈夫、だよ」

八幡「ならよかった」

という感じにバスの中を過ごした。というか戸塚さん吐く気配が一切なかったし。ただの体調不良として考えた方が幾分合点がいく。大丈夫って言うてからいつものこう、なに？かわいい笑顔だったし。外から入る陽射しが頬に当たる。

遠足の目的地に着いて、さっそく訪れた自由時間、英語で言うところのリータイム、こつこつある程度限られた範囲だと班行動とかないから超便利。俺も遠足を堪能するとしよう。

それなりにある自然、涼やかな風、鳥のわずかな鳴き声。実に心地がいい。本を読もう昼寝をしよう。え？わざわざここでやらなくてもいいって？こつこつ特別な環境で読書したり昼寝をするのがいいんじゃないか。別に他にやることがないわけではないから勘違いしないように。

わりと危なかった。うっかり熟睡してバスに乗り込めなかったところだった。

存在を認識されない人間（それを一般にぼっちと言う）にとってはこういうときの危機管理が重要になってくる。まだ、「あれ？この席誰だっけ？そもそもいたっけ？」みたいな感じの扱いならいい。いたかもという話がおきるからな。

だけどな。そんな会話や扱いすらされない俺にとっては危険なんだ。おいてかれるのも問題だが、俺自身、おいていかれたことに気づかない可能性があるのだ。そしてそのまま閉園時間を通り越してしまうのだ。従業員も帰宅して完全に帰れなくなる。こうして一人、この世から消される存在が現れるのだ……。消されるのに現れるってなんだかおもしろい。ははは……。

戸塚「あ、比企谷君」

八幡「あ、どうも。戸塚さん」

そうか、俺の隣には人がいるのか。今までの経験上初である。隣に人ってなんか婚約者みたいな言い方だな。べべべ別にと、と戸塚さんとどうこうなんて思ってないし？ないし？

そしてなぜか戸塚さんは不機嫌な顔になっていた。あれれ？まさか心読まれた？読心術の使い手なの？

戸塚「なんか比企谷君、僕との距離遠いよね？」

八幡「そ、そうですか？」

あれ？予想してた言葉がじゃなかった。

距離？まさか本当に隣でいいのか　このままずっと隣でいいのか

戸塚「うん、なんなんだろうね。なんか、壁？みたいなものがある、
というか……………」

八幡「気のせい、だと思いますが」

あいにくだが、俺はまだ戸塚さんという存在を認識できていない。
彼（？）の情報を完全に捉え、その上で俺との関係を作ったとしたと
きのメリットデメリット、黒字赤字の計算にパーセンテージをかけ
る。おそらくその計算のための式を探すというのが壁と見えている
のだろう。数学嫌なのにこういう計算大好き。

というか、壁？って言ったときの少し首を傾げて言ってくるもん
で、やばいです……………」

戸塚「そう、かな……………」

八幡「そう、ですよ」

そっかと戸塚さんは呟いて向きを改めた。
特に会話はないまま、景色は移り変わる。

それから学校に着くまでそこその量（俺からしたらかなりな量
だが）の会話をした。

—————

本日11月6日、晴天。

遠足の熱は冷め、二年は修学旅行から帰ってきてしまった昨日。こ
れで学校の人口密度も高くなってしまふ。

まあ、俺と俺の周りは常に空気だから学校の人口密度が高くなって
も大して変わらないのだが。

という俺は今日も昼休みは見つけたベストプレイスで昼ごはんを

食べる。

今日も今日とて昼休みに部活動さんは練習をする。ここからはテニスコートが見え、ボールとラケットが弾くリズムはここまで綺麗に響いている。ほんと、よくやるよね。

今日の練習も終わりなのか、テニスコートにいた生徒たちはずらずら解散していく。と、そのうちの一人がこちらに向かって歩いてくる。いな、少し足早だ。ちとちとこちらに向かってくる。なにそれかわい………。てか、見覚えがある。

「比企谷君」

かわいい子が俺の名前を呼んでいる。手を振りながらこちらに向かってくる。どんだけ向かってくるのを強調してんだよ俺。

ええと、あ。戸塚さんか。印象深いと名前を覚えてしまつもので、彼(?)は覚えた。というか、印象深くつても相手が名乗ってくれないから覚えられない事例が多々発生するから覚えてないんだが。

八幡「戸塚さん、どうも」

戸塚「うん！」

くっ……。なんなんだこの笑顔のダメージは。そんな純粹は目で、笑顔をこちらに向けないでくれ！

八幡「戸塚さんってテニス部だったんだ」

戸塚「そつだよ。ねえ比企谷君？」

八幡「なんですか？」

戸塚「こんど、どこかでテニス、しない？」

これはこれは、もしかするとデートというやつですかね。初めて誘われたぜ！ぶひっ。

八幡「いいですよ」

戸塚「やった！」

そんながつつり喜ぶほどのなのか？というか、両肘を内に折ってグー作るとかかわいいにもほどがある。

戸塚「そ、それじゃあ。あ、ええと。け、携帯の番号、教えて？」

……。

八幡「はい」

渡す。

戸塚「ありがとう」

笑顔。

はあ、まさか頭の中で言葉が一語ずつしか出せなくなるとは。あまりのシヨック（嬉しさ）の大きさが影響だろう。

というか、午後の授業集中できなかった。戸塚さんのイベントで浮かれてしまった。まあ数学と物理だからなにせよ集中しなかったけど。

さて、帰るか。

と、廊下を曲がろうとした俺の目線の先に人一人。これはあれだな。これから俺がどう頑張っても。ぶつかるな。

どん、と俺はぶつかる。女子と。

彼女は力がないのか、後ろ向きに倒れこむ。右手を彼女の首あたりに添えて彼女を支える。うわぁ、これやってみたかったやつじゃん。そして彼女は俺の顔を見るとやたらめったら驚いた表情を作り出した。

……いくら眼が腐ってるからってその反応はちょっと、ねえ？

八幡「あ、すみません」

ぶつかったことに対しての謝罪であって、決して腐った眼で怖がらせたことに対してではない。

すると、彼女は首を横に振って左手は胸に、右手は左手首を握る。少し赤みがかった黒い髪。この黒さは深いものではないが、とても綺麗だ。身長は俺よりも低い。まあ俺も高い方じゃないんだけど。ちなみにかわいい。そして、胸がでかい。これにさっきぶつかったと思うと……、ケフンケフン。んんん。

待てよ。彼女どっかで見なかったか？なんか、見たことある感じがするんだが。気のせいかな、はたまた学校ですれ違ったか。そんなところか？

というより、彼女のそわそわってあれだわ。俺がいつまでも手を首に回してるからだ。確かに俺が女子だったらいケメンじゃないやつに抱かれても嬉しくないもん。早く離そう。

ということで、離れたら彼女は颯爽と走っていった。

………なんか言えよ。

あまりにもショックだったのか？

はあとため息を吐くと、足元に生徒手帳が落ちている。彼女のものだろうか。まあ、拾っておくかとそれを拾い上げる。さてさて名前はどうか。

そこには「由比ヶ浜結衣」という名前があった。

聞いたことある名前。か？なんか聞いた気がするが、どこで聞いたかまったくわからない。

てかなにこのラブコメディベントー……。普通こんなことあったら落ちるよ？いいの？神様いいの？俺が落ちちゃってもいいの？

というどつでもいいことを考えながら、由比ヶ浜という名前の出どころを思い出そうとする。

……。

うん、無理。あれれ？俺ってこんなに記憶力なかったっけ？もう年か？年なのか？いつの間に年をとってたんだ？

あれ、なんでだろう。少し寒気がした。後ろの方からずずっと。振り向きたい気もあるのだが、一度と帰れない気がしたからそのまま俺は下駄箱に向かう足を進める。ひとまず逃げたいです。何の冷気か知らないけど、いや知らないからこそ、怖いです。

今日は疲れた。主に冷気のせいで。俺は自分の部屋に明かりを灯し(最近つてすごいよね。スイッチ一つで明るくなるとか。俺はいつ時代の人だよ)、ベッドに倒れこむ。ベッドってドよりもトって感じに言ってる気がするのって俺だけ？

八幡「由比ヶ浜、結衣」

彼女の生徒手帳を片手にそんなことを呟いた。

どこかで聞いたことあるんだよね……………。

というか、どっかで見たよね。ほんと、どこだっけ。